

第2回多摩川流域歴史セミナー

『武蔵国府の成立と多摩川中流域の古代集落』

講演：江口桂氏

(府中市文化スポーツ部ふるさと文化財課長)

－開催報告－



『多摩川50景』 大栗川合流点

平成27年1月18日（日）
多摩川流域懇談会

『多摩川流域歴史セミナー』

「多摩川流域歴史セミナー」は多摩川と人間の関わりの歴史を掘り起こし、「多摩川らしさ」としての地域文化を再発見することを目的として、先史・古代、中世・近世、近現代と年代を追いながら、多摩川流域の博物館、歴史館を会場として、地域に則したテーマで随時公開セミナーを開催していきます。

講演『武蔵国府の成立と多摩川中流域の古代集落』

講演：江口 桂 氏

■はじめに

府中市には「スーホの白い馬」や「かさじぞう」で有名な赤羽末吉先生に絵を描いていただいた「武蔵府中郷土かるた」があります。スライドの1枚目にその「い」の札、「いちばんはじめに 武蔵の国府」を掲載しています。この「武蔵府中郷土かるた」は、昭和48年に発行されて以来、今でも市内22の全小学校第三学年の児童に配布しており、文化財の保存と活用という意味でも大変重要だと思っています。私は、府中市を中心としながら、市域を超えて多摩地域全体に視野を広げていくことで、多摩地域の古代の歴史を明らかにしていくことができると考えています。私たち行政の職員と市民の皆さんが協働で、多摩川流域全体の歴史を考えていくことがとても大事なことだと強く思っています。

■古代律令国家の成立と国府

近年、話題になっている「道州制」として地方自治体を広域的にまとめていこうとする制度のもとになっているのは、古代の律令国家がつくり出した五畿七道という制度です。全国を東山道や東海道など8つのブロックに分けて、その中に国をつくりました。現在、都道府県は47ですが、古代では68ぐらいの国（嶋）に分かれており、そのうちの 하나가、今日お話しする武蔵国です。武蔵国は、現在の東京都と埼玉県のほぼ全域と神奈川県の川崎市と横浜市の一部を含む広大なエリアで、そのうちの国府、武蔵国の首都が置かれたのがここ府中市です。「武蔵」の名前の由来は、もともと「身狭むさ」という1つの国であったのを、「身狭上むさがみ」（相模）と「身狭下むさしも」（武蔵）に分けたという賀茂真淵の説などがあります。最近、

人間文化研究機構理事の平川南先生は、上野、下野、信濃、甲斐、相模、下総の6つの国の間を刺す意味で、「六刺＝ムサシ」としたとおっしゃっています。更に、西日本では地域の力が非常に強かったため、地域の勢力基盤がそのまま律令制の国（出雲、吉備など）になっているのに対し、東日本は、中央政府が律令体制をつくっていく過程で国の名称をつけたとされています。例えば、交通の結節点＝「交かい＝カい」とか、6つの国の間を刺す意味で「六刺＝ムサシ」とつけたと考えられています。

さて、ここからは、少し、古代社会全体についてお話ししましょう。奈良の都、平城京の貴族の邸宅と国府の宅地の大きさを比較すると、平城京の三位以上のトップクラスの役人では、4町四方（約67,000㎡）です。武蔵国府の国司は、四位～五位クラスです。平城京では約1町四方（16,000㎡）ぐらいの敷地を与えられていたと考えられています。私の先輩である府中市の荒井健治さんは、発掘調査の成果により、武蔵国府の一つの宅地をおおよそ1,000㎡と想定されています。役人の給料については、寺崎保広先生によると、最も高い位で、概算の給料が2億円以上、武蔵国の国司（四位から五位ぐらい）はおおよそ2,000万円から4,000万円ぐらいとされています。また、貴族の衣装は、天皇の白を筆頭として、ランクごとに衣服の色が決められていました。武蔵国の国司の五位クラスでは、浅あさ緋ひという浅いオレンジ色の服を着ることになっていました。

さて、高校の日本史の教科書では、古代の貧しい暮らしの象徴として山上憶良の「貧窮問答歌やまのうえのおくら ひんきゅうもんどうか」がでてきます。しかし、大東文化大学の宮瀧交二先生によれば、国文学の世界では、「貧窮問答歌」は、現

実の世界を見て語ったものではなく、中国の「貧窮^{じつ}可憐^{かりん}」という漢詩をもとに作られたとする説が定説化しつつあります。にもかかわらず、高校の日本史の教科書では、いまだにこの「貧窮問答歌」が古代の貧しい暮らしを代表する歌だと言われていることに問題があると思っています。歌の中で「伏廬^{ふせいお}の曲廬^{まげいお}の内に」（堅穴建物が倒れかかっていたり、曲がっている内に）と出てきます。武蔵国府の建物も、多摩地域全体でも多くの建物はこの堅穴建物が採用されています。これまで府中市内では、1,700箇所近い発掘調査で5,000棟ほどの堅穴建物が発見されていますが、焼けたことによって屋根と壁の構築材が残っている堅穴建物がまれに確認されます。縄文時代では壁がある堅穴ではなくて、伏屋式という屋根が地面まで伏せられて、屋根は土葺き、土の屋根だということが定説化しつつあります。しかし、少なくとも武蔵国府の堅穴建物は壁立ちだったと考えています。堅穴建物は、貧しいためではなく、東国の気候風土や様々な機能が求められたからこそ、平安時代まで遣われて続けたのだということをぜひご理解いただきたいと思います。

国府とは、飛鳥時代から平安時代にかけて、令制国の国司（役人）が政務をとった役所で、いわば令制国の首都である古代の政治的都市のことです。そして、国府の中でも国司が政務をとった役所の中心を国庁、その周辺の重要な役所群を国衙^{こくが}、それを中心として広がるエリアを総称して国府と呼んでいます。武蔵国府では、大國魂神社の境内とその東側に国庁とその周辺の国衙があり、東西約2.2キロ、南北最大1.8キロの範囲に国府域が広がっています。



武蔵国府域の空間構成（江口 2014 より）

国府の近くには寺院や総社がつくられた例がありますが、総社は平安時代の終わりに建てられたと考えられています。その頃、国司が国庁に入る前に、お宮でお参りをして入っているのです。古代は儀式が非常に重要視された時代ですので、国府と国分寺とお宮というのは三点セットで考えていくべきだと思います。

■国府の選地とその共通性

①（原則として）国の中で、より都に近い立地

武蔵国は、地方行政組織である五畿七道の中で東山道に所属していました（771年に東海道に所属替え）。西暦670年ごろ（天武天皇の時代）に全国に道路網が一律にしかれたという説が定説化しつつありますが、古代の道路というのはなかなか遺物が出土しないため、時期の特定が難しいです。その古代の駅路沿いで、より都に近い場所に国府は置かれます。道路公団にあつて全国の高速度道路の設計を担当されていた武部健一先生は、古代の駅路に注目し、1,300年前につくられた山陽道という駅路のルートと駅家^{うまや}（約16キロごとに置かれる中継基地）の場所が、現代の高速度道路、インターチェンジと同じだという共通性に気づきました。古代が現代につながる注目すべき見解です。

②国と国とを結ぶ駅路、国府と諸郡を結ぶ道路網と河川沿岸などの水陸交通の要衝

すでに多くの方によって指摘されていますが、国府の立地について、駅路と河川が重視されたことは間違いありません。武蔵の国府も多摩川と東山道武蔵路という駅路と河川の結節点である交通の要衝に置かれています。

③災害（特に津波）に遭いにくい、安全な広い国府域を想定できる立地条件

東日本大震災から今年で4年になりますが、発生時に府中市は国府つながりのまち・宮城県多賀城市に緊急支援物資を届けることになり、私もその一員として同行しました。津波は沿岸から3～4キロ奥、最大10キロ到達したと言われていますが、第一次陸奥国府と言われている仙台市郡山官衙遺跡群、同陸



奥国分寺跡、第二次陸奥国府と言われている多賀城跡のいずれにも津波は到達していません。国府・国分寺は津波が到達しない場所を選んでいることが分かります。東日本大震災は平安時代前期（西暦 869 年）の貞観地震による大津波の再来と言われており、東日本大震災が起こるまで、「日本三大實録」という当時の国の正式な文書に出てくる津波の記録は、事実ではなく強調したものと考えられてきましたが、震災発生以降、その見直しがされています。

④在地の有力者は設置場所の選定に関係しない（ただし、国府運営のために地方の勢力を考慮することはある）

坂東（関東地方）の国府の立地を見ていくと、下総国府（現千葉県市川市）は、旧利根川、太日川と駅路の結節点に位置しています。常陸国府（現茨城県石岡市）も恋瀬川と東海道の駅路の結節点で、その立地は武蔵国府とよく似ています。下野も思川と東山道駅路の結節点にあります。



坂東の飛鳥時代の古墳と駅路・国府（江口 2014 より）

上野国府（現群馬県）は、現在の群馬県前橋市の総社一帯に置かれたことが、発掘調査で分かってきました。現在は国府のすぐ近くを利根川が流れていますが、古代では数キロ東を流れており、上野国府だけが成立当初は河川や東山道駅路が国府を通っていませんでした。これは様々な理由があると思うのですが、上野だけは関東の雄と言われるように古墳時代の勢力が非常に強かったために、国府を駅路と川の結節点でなくて、地元の勢力が強い地域に置かざるを得なかったといわれてきました。しかし私は、逆に国府をその地に置くことによって、円滑に管

理・運営するためにうまく地域を利用したと考えています。これは異論もあると思いますが、発掘調査が進んでいくことで実態が明らかになることを願っています。

■なぜ武蔵国の国府が府中市に置かれたのか？

武蔵地域の古墳時代の後期（6～7 世紀）は、北武蔵、今の埼玉県の行田市周辺に中心がありましたが、7 世紀の中頃に南武蔵の府中周辺に中心が移ってきたと考えています。それは武蔵府中熊野神社古墳、上円下方墳がつくられた影響が大きいと考えています。古墳時代の国府がつくられる直前の古墳と集落の分布を見ていくと、多摩川の中流域の中でも古墳と集落が重ならない地域と、古墳はあるが集落がない地域（国立市周辺など）など、地域により差があることが分かります。

お配りしたパンフレット「ふちゅう地下マップ」をご覧ください。従来、国府は平城京の遷都、西暦 710 年以降の 8 世紀前半につくられたと考えられてきましたが、近年、島根大学の大橋泰夫先生がおっしゃっているように、西暦 700 年をまたぐ頃（7 世紀の終わりから 8 世紀初頭）に国府がつくられたと考えています。つまり平城京の遷都後ではなくて、藤原京の成立の影響を重視すべきという考えです。武蔵国府跡でも、7 世紀末～8 世紀初頭突如として東西 2.2 キロ、南北最大 1.5 キロほどの範囲に国府が形成されます。

平成 22 年に JR 府中本町駅前から、都から赴任してきた国司の居宅兼執務場所である国司館が発掘され、それも 7 世紀の終わり頃につくられています。武蔵国府は、その後の奈良時代になって整備され、平安時代の終わりまで府中の地に存続しました。国府域は、国庁、国衙の役所を中心として東西約 2.2 キロ、南北最大 1.8 キロの範囲に広がることが分かっています。このように、国府域の実像が明らかになっている国府は国内でもここ武蔵国府だけで、昭和 50 年以降、市民の皆さんの発掘調査に対するご理解、ご協力を賜物といえます。ちなみに、平安時代



の前期（9世紀）の日本の人口は550～600万人くらいで、そのうち武蔵国は約17万人と想定されています。武蔵国府の人口は難しいのですが、約1,000人、その中でも国司を中心とした国府の中核のメンバーは100人前後だと想定されます。

前半のまとめとして「なぜ、武蔵国の国府が府中に置かれたのか？」ということについてです。

①国府の管理・運営を在地の有力者（後の郡司層）に任せられるだけの下地が整っていたこと

まず、7世紀中頃に武蔵府中熊野神社古墳（上円下方墳）が府中につくられて、武蔵国の中心がこの府中に移ってきたことによって国府の管理・運営を在地の有力者（後の郡司層）に任せられるだけの下地が整っていたことがあげられます。

②武蔵国の中で南から見て都に近い立地にあること ③駅路（東山道武蔵路）、伝路（国府と郡を結ぶ道路網）と多摩川の交通の結節点という水陸交通の要衝に府中があったということ

④災害に遭いにくい、安全な広い国府域を想定できる立地条件。多摩丘陵を越えて最初の多摩川の渡河点の段丘の広い面がこの府中だということ

府中の立地をみると、多摩川のつくり出した沖積低地から一段高い段丘の上に国府域が広がり、北に約2.5キロに国分寺が置かれます。東山道武蔵路が南北に走り、都から見て南の多摩丘陵を越えて、最初の多摩川の渡河点がこの府中になります。武蔵国は、宝亀二（771）年まで東山道に所属していますので、正式な都からのルートは群馬県高崎市周辺から南下することになっていました。しかし、「万葉集」などから、私は、奈良時代の早い段階から相模国府との連絡路があったと思っていますが、残念ながら、まだ多摩丘陵を越える古代の道は特定されていません。この府中の地は、古代の地方都市を置くにふさわしい武蔵国の政治・経済・文化の中心である武蔵国の首都だったのです。

■考古学から明らかにできる古代の多磨郡と郷の実態

この話をするきっかけになったのは、とある研究

者の方から、古代の多磨郡の範囲はどうだったのかと聞かれ、正確に答えられなかったことです。古代の多磨郡の範囲について、今でもよく取り上げられるのは、「国史大辞典」に出てくる武蔵国の多磨郡の図です。南は町田市、東は杉並区あたり、北は清瀬市あたりまでの範囲です。しかしこの範囲について、何がよりどころになっているか、実は分かりません。今でも多磨地域は、北多磨、南多磨などと呼んでいる地域に分かれていますが、そのもとはこの古代の多磨郡だったはずなのですが、残念ながらその範囲は分かっていません。「和妙類聚抄^{わみょうるいじゅうしやう}」という平安時代の辞書の中に多磨郡内にある「郷^{ごう}」名が記載されています。古代の地方行政組織は、国評五十戸制から国郡郷里（のち郷のみ）制に変化しています。国が今の都道府県、郡が今の市にあたり、その中に郷という今の町を少し広くしたようなまとまりに分かれていました。古代の多磨郡には10の郷があって、多摩川の上流から小川、川口、小楊郷^{おやけ}、小野、新田、小嶋郷^{おじま}、海田^{あまた}、石津、狛江^{せえ}、勢多郷^{せた}となっています。この郷を現在のどこにあたるかについては、郷土の森博物館の小野館長や深澤さん、河野喜映さんなどによる長年の研究成果があります。これらを踏まえて私は、発掘調査が見つかった堅穴建物が出ている集落を1つずつ調べていき、位置を地図に落として、その集落の場所と変遷を検討しました。南は町田市、北は国分寺の北、西は奥多磨、東は今の世田谷区周辺までの範囲の中で、堅穴建物が確認されている集落を調べました。

以下、具体的な検討結果を見ていきましょう。例えば、町田市のすぐじ山遺跡では、堅穴建物跡に時期差があることが分かります。ある一定の範囲の中でも、均等に堅穴建物が移り変わっていくのではなく、ある場所を選んで堅穴建物がつくられているのです。町田市域で、このように時代を追って古墳時代から飛鳥時代、奈良時代、平安時代と堅穴建物の時期の変遷と分布を検討することで面白いことが分かります。古墳時代から飛鳥時代で集落が途絶えるもの、飛鳥時代から奈良時代中ごろまでに集落が営まれるもの、古墳時代で集落が途絶えて平安時代に



復活するもの、飛鳥時代から平安時代までずっと継続してつくられるもの、平安時代になると出現するものがあるのです。その分布を河川と古代駅路をあわせてみると、飛鳥時代に出現する集落は駅路ではなく河川流域沿いです。その後、飛鳥時代から奈良時代中ごろに出てくるのは駅路沿い、古墳時代で集落が途絶えて平安時代に出てくるものは多摩丘陵に出現しています。集落が継続するのは、多摩丘陵、河川、駅路沿いなのです。平安時代に集落が出現するのは河川ではなく、多摩丘陵のほうに集中していることが分かります。つまり古墳時代から飛鳥時代にかけては、河川流域沿いに集落が展開し、それが奈良時代には駅路沿い、平安時代になると多摩丘陵に集落が営まれていきます。多摩丘陵に出現する理由は、須恵器や木工生産などの生業に関わる人たちが平安時代にこの多摩丘陵の町田市が一番北の方に住み始めたことが要因と考えられます。

次に、多摩地域全体で集落の分布を時期別に検討すると、各地域によって集落数のピークに差があり、継続して中核的な集落がある地域もあれば、そうではない地域に分かれます。この違いの一つが、古墳時代後期から飛鳥時代の古墳の分布にあります。多摩川流域の有力な古墳である切石積石室（高度な石室構築技術を持ってつくられた古墳）は、府中市の武蔵府中熊野神社古墳、多摩市の多摩稲荷塚・臼井塚古墳、八王子の北大谷古墳、三鷹市の天文台構内古墳などがあります。これらの古墳は、おそらく後の郡司層、郡司という地元の役人になっていく地域の有力者のものであり、中核的な集落が継続していく地域がこのような有力な古墳がつけられた地域と重なっていることがわかります。なお、最近、狛江市の猪方小川塚古墳で同じ切石積横穴式石室が発見され、後の狛江郷に当たる地域にも核となる有力者がいたことが分かります。横浜歴史博物館の平野さんは7世紀の中頃（西暦650年頃）に基盤やネットワークを異にする複数の集団と首長が存在し、これが後の郡司層クラスに当たる有力豪族だとおっしゃっています。ただし、その中でも熊野神社古墳の被

葬者は、私はほかの古墳の有力者とは別出自だと考えています。

このように、集落のまとまりから、多磨郡の郡の領域と郷の範囲を考えたのが“江口試案”です。北は「国史大辞典」では清瀬市まで、現在の東京都までを多磨郡の境にしていますが、古代の集落は武蔵国分寺から先の現在の小平市周辺で発見されていません。小野さんがおっしゃっているように、ここは「武蔵野」という野原が広がる空間で、水の便も悪いため古代の集落はなかったと考えています。古代の多磨郡の北の範囲は武蔵国分寺の北までで、その先は入間郡と考えています。河川流域ごとに集落が分布していくことを考えれば、武蔵野を境として多磨郡と入間郡に分かれていたとすべきだと思います。

次に、東は現在の世田谷区の西半分あたりまでが多磨郡、そこから東は荏原郡と考えています。南は「国史大辞典」の図では、町田市が多磨郡となっていますが、集落の分布を見ると、鶴見川流域と恩田川という河川流域に古代の集落が展開しています。町田市と多摩市の境にある丘陵を境にして南側、町田市の大半は都築郡、北側が多磨郡で、集落がまとまりを持っていることが分かります。古代では郡の境界は線ではなく帯状になっていながらも、明確な境界認識があり、そのなかに、郷として捉えられる集落のまとまりが捉えられる、これが結論です。このように、多磨郡の範囲と郷のまとまりが考古学の発掘調査の成果に基づく集落の分布で考えられるのです。郷の比定については、もともと多摩川右岸の上流域に小川、川口、小野、小楊、多摩川左岸の下流域に狛江、勢多、小嶋という2つのグループがあった。そして7世紀の終わりから8世紀の頭に国府が設置され、それを支える基盤が国府周辺に形成し、人口が集中したことによって国府の周辺に新たに石津、新田、海田という郷をつくったのではないかと考えています。



古代多磨郡の郡境と郷域の復元図（江口 2014 より）

現代の私たちは、市町村の境界を地図などによってはっきり認識できますが、古代の人は河川や山などの自然地形によって漠然とした範囲を境界と捉えていたのではないかと考えています。多磨郡の領域については、多磨川とその支流の水系ごとに集落が分布していることや広大な武蔵野が広がっていることから捉えられること、郷の比定とその変遷についての江口試案も提示しました。郷土の森博物館の深澤さんは、瓦の貢納体制が多磨川右岸の「多上」、多磨川左岸の「多下」という多磨郡の中で上下に分割されていたとおっしゃっています。私もそれが正しいと思っており、小川、川口、小楊、小野、新田が「多上」、多磨川下流域の小嶋、狛江、勢多が「多下」と考えて良いでしょう。多磨郡の領域は、河川水系と広大な武蔵野という原野などの地形に基づいて設定されていたということ、郷の範囲は多磨川を中心とした水系とその周辺の沖積低地及び谷間に展開する集落が根拠となっていたのです。ただし、この考え方は、私が考古学的に言っている話で、文献史学の先生方の中には批判的な方が多いです。古代の文献史学の中では、郡まではある程度の領域は設定されていたが、その下にある郷は五十戸一里制（後の郡郷制）に伴って戸籍をつくる際に、律令国家が意図的にあるエリアを分割しているだけで、地域の実態を表していないというのが定説となっています。

最後に、武蔵国府はなぜ府中に設置されたかについてのもう一つの理由をお話して終わりたいと思います。多磨郡の郷は、もともと2つのグループがあり、国府が置かれた後に新たに郷が設置されたと言いました。つまり、マクロ的には水陸交通の要衝に

府中の地を捉えて国府を設置するが、ミクロ的な視点で言えば、多磨郡の上下の地域編成の境界付近、つまり上下二分割の中間地帯に国府が置かれたという2つの視点で考えてみました。飛鳥時代から奈良時代にかけての古代社会は、律令国家の成立期という激動の時代の動きの中で、集落が再編成されたはずで、多磨地域全体で見た場合、時期ごとの分布と変遷に地域差があることがわかりました。例えば町田市の北の多磨ニュータウン周辺では、開発に伴う生業に係る工房などが置かれました。このように国家的なレベルの開発事業にかかわる労働力確保とその維持・管理を目的に集落の再編があったはずで、もう一つは、武蔵の国司は都から赴任してくる役人で、地元とのつながりがなかったため、郡司を中心とした地元の協力が欠かせなかったと思います。国府の設置は、それを維持・管理していくだけの下地が地域に整っていたことと一体的に捉えていくべきだというのが今日の最後の結論です。

本日の話は、まず、国府の成立について、全国的な視点から立地や水陸交通の要衝などの条件を重視すべきだと指摘しました。更に、それを地域の中で見ていくことによって、多磨郡の領域、その中の郷の分布というのは、河川水系ごとに捉えていけばこれまでと違った考え方ができることをお話ししました。

1点付け加えると、多磨郡とその周辺でも駅路沿いで拠点となる集落が展開している場所があります。例えば、町田市のすぐじ山遺跡や木曽森野遺跡では、^{ばんじょうつき}盤状坏（奈良時代前期の優れた土師器）という土器がたくさん出てくる集落があり、埼玉県所沢市の東の上遺跡でも同じく盤状坏が出てきます。これらの遺跡は国府から約16キロの距離にあり、ちょうど駅路の^{うまや}駅家の設置距離に合致します。これらの遺跡は駅家と特定されていないのですが、駅路沿いの拠点的な集落だったからこそ盤状坏が出土したのではないのでしょうか。つまり、河川水系とともに駅路との関わりも集落が展開していく上で重要だったと考えられます。水陸交通の要衝と河川水系が古代社会を考えるうえでとても大事だったことを最後に強調して、私の話を終わらせていただきます。

意見交換会『武蔵国府の成立と多摩川中流域の古代集落』

コメンテーター：小田 静夫 氏
江口 桂 氏
小野 一之 氏
コーディネーター：神谷 博 氏

【参加者】 「条里制」は多摩川にあったのでしょうか。

【江口】 府中では古代の条里の遺構は確認されていません。遠藤吉次さんが「武蔵府中の条里」という論文を書かれていますが、東京競馬場がつくられる以前には、是政条里が残存しており、それをもとに府中の条里制を復元されています。最近では日野の落川・一の宮遺跡の発掘調査報告書で条里地割を復元しており、対岸の国府の方にもあったのではないかと書かれています。郷土の森博物館の学芸員の深澤さんが郷土の森博物館紀要第 21 号（2008 年）のなかで、武蔵府中の条里の復元をされていますので、詳しくはそちらをご覧ください。

【参加者】 他の国府とあわせて何か特徴がありますか。

【江口】 東国（東日本）の国府は 2 つのパターンがあり、1 つは国分寺を取り込む国府で、もう 1 つは国分寺を取り込まない国府です。武蔵国府は国分寺を取り込んでいませんが、下総国府や上野国府は国分寺と国府をセットで国府域と捉えてよいと考えています。

【参加者】 府中市域の多摩川はいつの時代に現在の流路になったのでしょうか。

【神谷】 古代の多摩川の流路が北の方に流れていたということで、南側には広い河川敷があったらうと思いますが、そうすると北側だけが国府の範囲だったのか、真ん中に川があって両側に国府を作ることは想定されていなかったのかなど疑問に思います。

【小野】 多摩川の流路は北の方に寄っていたというよりは広い範囲を暴れていました。そのため、生活圏ではなく、河原であったと考えてよいと思います。だからこそ、分倍河原の合戦が起きたのだと思います。その合戦の舞台というのは、多摩川を挟んで関戸までおよんでいましたから、多摩川もそ

うエリアの中でイメージして行けば良いと思います。

【神谷】 国府と国分寺の関係についてお話がありました。府中では大國魂神社や杉山神社群など神社との関係についても補足していただければと思います。

【小野】 武蔵国府の中での神社は 11 世紀を境にして変わります。要するに武蔵総社が成立する以前と以後ということです。総社以前は国衙の国庁が中心にあって、周辺に神社があるという形式でしたが、総社以後は総社を中心としたプランになりました。その時代には国府も都から派遣されてくる役人ではなく、国内の在庁官人が政務をとるようになっていきます。

【神谷】 古代多磨郡の郷の設置、範囲に関する“江口試案”について、その背景などをお話ししていただければと思います。

【江口】 私は府中市の職員ですので、これまで府中市民のために府中の歴史を明らかにしようと調査・研究を行ってまいりました。そのなかで、府中のことを知るには多摩地域全体のことを知る必要がありますし、国府は全国に 70 近くありますので、他国の国府と比較してどうなのかなど、府中から多摩地域、全国へと視野を広げていくことが重要だと考えました。ただし、小田先生がおっしゃったように、市民の皆さんのご協力に基づいて得られた膨大な発掘調査データが蓄積されてきたからこそ、その成果をお話できるようになったのだと思います。外に視野を広げることで、逆に府中のことにフィードバックできる、それがとても大事なことでと考えています。

【神谷】 次は縄文時代の話を上流でと考えているのですが、次へつなぐ今後の展望や今日の位置づけなどをお話いただけますでしょうか。



【小田】 文献学者の方には漆紙文書を調べていただくなど非常に助かっているのですが、文献は時に疑われないといけないことがあります。一方で発掘というのはうそはありません。例えば盤状坏という素晴らしい土器が伊豆諸島でも発掘されましたが、これは都でしか焼けません。その場所にあるということは技術を持っている人が来たということです。

武蔵国の多磨郡について、今日初めて江口試案を聞きましたが、面白いですね。考古学のデータは報告書として一生懸命作るのが、なかなか読まれません。それを江口さんや深澤さんのように論文や単行本で世の中に出して普及していくことが重要です。

江口桂氏 プロフィール



1966 年 愛知県に生まれる

1988 年 中央大学文学部史学科国史学専攻卒業

1990 年 国学院大学大学院文学研究科博士課程前期修了

同年、府中市教育委員会に勤務

現在、府中市文化スポーツ部ふるさと文化財課長

著書に『古代武蔵国府の成立と展開』（同成社古代史選書）がある

総合司会：神谷博（多摩川流域懇談会専門運営委員会（歴史部会）委員長）



大きな広がりの中で地域の歴史を捉えていくことが大切だと思いました。今日のお話を通じて、時代の専門性を超えてつながっていく、そのような話ができ始めていると感じられました。歴史を通して地域とは何か考えていく機会になるのではと思います。この場を続けていく意味がありそうな気がして今日は力になりました。

開会挨拶：宮林茂幸（多摩川流域懇談会会長）



大学の私の研究室に卒業論文で横浜からたの研究をしている学生がいます。そのかるたを見ると、10年ごとに切り替えられて歴史・文化の動きが分かるようになっていきます。歴史的に子どもたちに残したり、私たちも思い起こしたりするようなものだと感じました。午前中の流域セミナーで多摩川沿いを歩きながら、多摩川いろはかるたのようなものができたらいいなと思いました。集落との関係ということでは民俗学の宮本常一さんによると、集落はだいたい300年ごとに生まれたり減ったりする変化があるようです。古代からそういう歴史の変遷を踏まえて多摩川全体の議論を深めていただければと思います。

館内紹介：小野一之（府中市郷土の森博物館館長）



郷土の森博物館は、昨秋に常設展示室をリニューアルオープンし、生まれ変わりました。参加・体験型の展示室になり、府中の歴史を考えていくキーワードとして、「国府」「宿場町」「まつり」の3つのテーマを大きく取り上げています。1つ目の「国府」については、1,300年前の律令国家が誕生したときに国府が置かれたことで、府中は他と異なる歴史を歩み始め、中世都市として展開していきました。2つ目のキーワードの「宿場町」ですが、全国に60いくつあった国府は機能しなくなったところが多かったのですが、府中が廃れず展開していったのは「宿場町」になったからです。今の府中の平面プランは宿場町の頃とほぼ一緒です。3つ目のキーワード、「まつり」は大國魂神社の例大祭である「くらやみ祭」のことです。国府の祭から宿場町の祭礼へと引き継がれて、現在も生活・文化面に大きな影響を与えています。そして、実はもう1つキーワードがあります。それは「多摩川」です。府中の南側を流れている多摩川は、国府が置かれた理由の一つになっていると考えられます。多摩川が合戦や漁場、行楽地となり、府中は多摩川と共に生かされてきました。多摩川が存在を通じて地域の歴史を見直していくことが重要であり、今回をそのきっかけとしたいと考えます。江戸時代の錦絵「諸国六玉川」の一つで、「武蔵調布」という歌川広重が描いた絵をご紹介します。江戸時代には全国の玉川がセットにされた「六玉川」が、歌枕となったり、錦絵や工芸品になったりしていました。武蔵調布の絵には布さらしをしている様子が描かれています。万葉集の東歌の中に「多摩川にさらす手づくりさらさらになにそこのこのこどこかなしき」という歌がありますが、国府の近くで朝廷に税として納める布を作っていたと考えられます。この絵は府中周辺の原風景と言えるのではないのでしょうか。今後多摩川の歴史・文化を考えていく上での参考としていただきたいです。

本日のまとめ：小田静夫



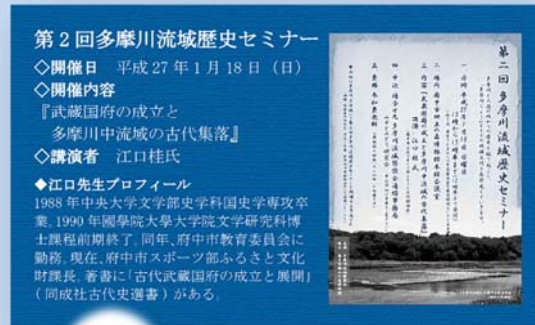
江口さんのお話を伺って非常に驚きました。考古学的なデータがきちんと整理され、話されていて武蔵国府のことで頂点に達していると感じました。私も関わって遺跡を発掘してきた資料が生きてきたと感じました。今日は本当にすばらしいデータをご紹介いただき感激しました。

閉会挨拶：船橋昇治（国土交通省京浜河川事務所長）



やはり川というのは、古い時代からいろいろと関わりがあったのだなと思いました。先生が新しく提言されていた多摩郡の中で、下流の方は多摩川を境にして集落ができており、上流、支流は川の周りに集落ができていくということで、きっと簡単に渡れるぐらいのところは同じ集落になっていて、なかなか渡れないところが境目になるのかなと思いながら話を伺っていました。今後も1,000年以上先まで地域と多摩川は関係していきますので、1,000年後には私たちがやっていることが考古学的に調べられることがあるのかなと考えました。歴史的なことも残して行きながら、楽しく川と付き合っていきたいと思っています。また、皆様のご意見を踏まえながら今後もよりよい川づくりをしていきたいと思っています。

各回の多摩川流域セミナーで「歴史セミナーカード」を配布しています。



表面 各回の歴史セミナー概要を掲載



裏面 会場となる博物館情報を掲載

第2回多摩川流域歴史セミナー『武蔵国府の成立と多摩川中流域の古代集落』開催報告

作成 多摩川流域懇談会

■多摩川流域懇談会は、多摩川にまつわる歴史文化を総合的に研究し、その成果をわかりやすく多摩川で活動する人が利用し、多摩川をより深く知ることができるよう、取組みの幅を広げ、活動を行っています。

■多摩川流域歴史セミナーに関する情報は京浜河川事務所ホームページをご参照ください。

URL : http://www.ktr.mlit.go.jp/keihin/keihin_index116.html

